

幼い時分、わが家は東京都板橋区の環状六号線沿いに、ちいさなタバコ店を営んでいた。店はかなり広く、その三分の二は瀬戸物をずらりと並べて販売しており、タバコのほうは角にウインドウを置いた狭いカウンターで売っていた。店番がそこに一日中坐り、ときどきやつてくる近所のお客と、カウンター越しにやりとりするのだ。

父は瀬戸物のほうに時間をとられ、母は家事が忙しいので、長男のわたしはまだ小学校に入学する前からタバコの店番を担当させられた。冬など、小さなこたつに入りながら、人や車が行きかう道路を眺めた。昭和二十年代末の話なので、ときおり前をアメリカ軍の戦車隊が数十台もキャタピラーを連ねて通過する。ものすごい轟音で家が揺れた。とても怖かったことを憶えている。

おもしろいもので、わたしは子供のくせにタバコが専売制であること、仕入れはカートンで行い、その大箱をあけて一つずつタバコを出して売ること、などに興味をもった。仕入れと小売の関係も理解していた。タバコの種類と値段もぜんぶ記憶していた。母から読み書きと九九算を叩きこまれたおかげで、お釣りの計算も速かった。「ピースを五本くれ」と分売を要求してくるお客でも、すぐに代金の計算を行えた。お金の出し入れも完璧で、お釣りがだしやすいように、札と硬貨を金種別に揃えたりもした。小学校入学のときは、すでに一人前の商人ができあがっていた。

ところがいつぼう、わたしは財布というものを持たなかった。小銭をいれておくなら、



絵・江口修平

計算上手の管理下手

荒俣 宏

ポケットという便利な場所があったし、だいいち母から毎日もらうお小遣いは、すぐに駄菓子屋か貸し本屋で消えてしまう。わが家の厳しい経済事情も熟知していたので、なるべく自力でお金を稼いだしては、好きなマンガ雑誌も買った。当時は子供でも、銅線やビンを集めて売ることができた。ただ、欲しいものがたくさんあったので、とうとう財布までは予算が回らなかった。

大学生でようやく、革の財布を購入したけれど、ポケットにお金をいれる習慣が身についてしまっているため、結局は財布とお金が別々になる。やつと財布の必要性を感じたのは、社会人になって海外に出て行くようになってからだ。だが、数十万円の大金をいれた財布は、パリの空港を出たとたん、スリに強奪された。ジャワのホテルでは、重い財布を部屋に放り出して外出しているあいだに盗まれた。今でも悔しいのは、どうも盗んだ犯人らしい男から、部屋のそばの廊下で、「おれは日本のお札を大量に手に入れたから、これから日本へ観光にでかける」と言われ、「それはラッキーだ。楽しんでくるといよ」と祝福までしてやったことだ。あれやこれやで、いままでに三百万円以上の損害がある。

というわけで、還暦を過ぎた今も、財布が身につかぬ状況は変わらない。わたしはあいかわらずポケットをジャラジャラさせながら歩いている。お金勘定の「神童」といわれた面影は、すでにまったくない。

あらまた・ひろし●作家、翻訳家、博物学・幻想文学・神秘学研究家。1947年東京生まれ。幅広いジャンルの著書は数百にも及ぶ。350万部を超える大ベストセラー『帝都物語』で日本SF大賞受賞(1987年)、『世界大博物図鑑第2巻・魚類』でサントリー学芸受賞(1989年)。

